

小学校学級担任の生徒指導観に関する考察

山 崎 保 寿（静岡県総合教育センター）

1 問題の所在

今日、学校を取り巻く社会が大きく変化してきており、児童生徒の健全な社会性を育成するうえで欠くことのできない社会体験、生活体験、自然体験等の体験が不足している状況が生まれている。学校では、国際化、情報化、高齢化、少子化等の社会の変化へ対応する能力の育成を目指して、国際理解教育、情報教育、福祉教育、環境教育、健康教育等に取り組むとともに、社会性を育てる生徒指導を充実させることが大きな教育課題となっている。

とりわけ、生徒指導の問題として登校拒否、いじめ、自殺等の問題が社会問題化しており、教員はそうした問題への対応に迫られながら、児童生徒の人格形成や社会性の育成を目指して日々の学級経営に取り組んでいる。社会の変化や保護者の価値観の多様化が進み、生徒指導に関する問題状況が複雑化する中で、学級担任の生徒指導の在り方も変化してきている。

登校拒否、いじめ、自殺などの問題行動が深刻化する中で、生徒指導の積極的な側面として、「問題行動に至らないように社会性を養うための訓練や生徒自身のおこなう自己開発的な援助」⁽¹⁾とされている開発的な生徒指導の側面が重要視されてきており、学級担任による学級経営や生徒指導の在り方が改めてクローズアップされてきている⁽²⁾。

小学校では、学級経営が担任教員の職務の主要な位置を占めている。特に、教員としての力量形成の途上にある初任者から教職経験6年目程度までの教員にとって、最初に高めなければならない力は、学級経営を中心とした生徒指導に関する力量である。生徒指導の今日的な問題の中で、学級担任が生徒指導に関してどのような指導観をもっているかは、生徒指導への取り組みの姿勢を大きく左右する。その指導観を生徒指導観⁽³⁾という言葉で表すならば、生徒指導の今日的な問題の中で学級担任の生徒指導観を考察することが重要な課題になっているといえる。

児童生徒の問題行動が深刻化する状況に対して、様々な問題行動への対応や対策については声高に叫ばれてきたが、小学校学級担任の生徒指導観の実際については、あまり分析や考察がなされてこなかった⁽⁴⁾。本稿の目的は、現代社会の教育課題から要求されている生徒指導の課題を踏まえ、小学校学級担任の生徒指導観の実際を考察することであり、その考察を踏まえて生徒指導観の獲得過程と研修との関連についての示唆を得ることである。

2 小学校における生徒指導の特徴

まず、小学校における生徒指導を考察する場合に、その特徴として大きく三つのことを指摘できる。一つは、文部省生徒指導資料集に「生徒指導とは、本来、一人一人の生徒の個性の伸長を図り

ながら、同時に社会的な資質や能力・態度を育成し、さらに将来において社会的に自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり、個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すものである。そして、それは学校がその教育目標を達成するために欠くことのできない重要な機能の一つなのである⁽⁶⁵⁾と示されていることが表しているように、機能としての本来的な生徒指導の捉え方が、小学校では中学校・高等学校の場合以上に強く見られることである。

つまり、領域的な分類としての学習指導と生徒指導という分け方よりも、各教科・道徳・特別活動、そして児童の生活のすべての領域に共通する基本的な機能として生徒指導が位置づけられ捉えられていることである。こうした捉え方がなされるのは、小学校では生徒指導が学級経営と一体化しており、学習指導においても発表の指導や小集団の指導など生徒指導に関する方法や内容が重要視されていることが大きな理由になっていると考えられる。

一方で、中学校・高等学校では校務分掌の組織名に生徒指導部、学習指導部などの名称が広く用いられており、校務分掌の内容が生徒指導と学習指導に領域的に分けられることが多く、機能概念として生徒指導を把握することの妨げになっていることが考えられる。したがって、小学校の方が機能としての生徒指導の捉え方が比較的普通になっており、日常の学習指導が積極的な生徒指導とほぼ等しい概念で捉えられているとあってよい⁽⁶⁶⁾。

二つ目は、「生徒指導は、学校がその教育機能を達成するための重要な機能の一つである。(中略)生徒指導の意義は、このような青少年非行等の対策といった言わば消極的な面だけにあるのではなく、積極的にすべての生徒のそれぞれの人格のより良き発達を目指す⁽⁶⁷⁾」というように、積極的な生徒指導観が早くから文部省資料集をはじめとして見られていたことである。積極的な生徒指導とは、開発的な生徒指導に相当する考え方であり、例えば、グループエンカウンター⁽⁶⁸⁾などの手法を用いた学級における社会性の育成を図るための意図的な指導を指している。

小学校における生徒指導の特徴として、いじめ、登校拒否、校内暴力等の問題が中学校・高等学校に比べて数的にも深刻の程度においても軽少なことから、小学校では積極的な生徒指導の意味に近い生徒指導観が普遍的に見られることを指摘できる。平成7年度文部省学校基本調査によれば、学校嫌いを理由に年間30日以上欠席した児童生徒の人数は、小学校で16,566人、中学校で64,996人であり、全国的に人数が増加しているものの、小学校は中学校の4分の1程度の人数に止まっている。いじめの程度についても、発達段階の関係で小学校では中学校に比べて軽少の程度で済んでおり、問題行動への対応を図るという消極的な生徒指導観よりも学級経営を中心として社会性の育成を図っていくという積極的な生徒指導観が見られるのである。

三つ目は、最近の小学校における教育全体の特徴として、現行学習指導要領に基づく新しい学力観の中で出された「子供の側に立った教育を創造する」⁽⁶⁹⁾という基本的認識から、教員は児童を指導するよりも支援するという考え方が、特に、個々の児童に対する生徒指導の場面において見られることである。つまり、「小学校及び中学校の指導要録の改善について(審議のまとめ)」(1991.3.13)において、「学習指導を進めるに当たっては、児童生徒の自己実現を目指す学習活動を支援する立場

に立って、児童生徒一人一人の可能性を積極的に見だし、それを伸ばすよう努めなければならぬ」、「学校は、学習指導の過程や成果などについて不断に保護者との共通理解を深めることに努め、児童生徒の学習を適切に支援する」と示されて以来、学校では支援という言葉が児童生徒の側に立つ学習指導を進める視点として大きな意味をもつ言葉として使われるようになったことである。

いじめ問題への対応として出された「児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議」の報告書（1996.7.16）においても、「集団活動等の推進と子ども自身の取り組みの支援」として、学級活動におけるロールプレイの取り入れをはじめ、「ボランティア活動や自然体験、異年齢集団での活動など人間関係や生活体験を豊かなものとする教育活動を積極的に」⁽¹⁰⁾ 取り入れることを提言しており、支援という言葉が積極的な生徒指導の内容と密接な関連を持って使われている。小学校を中心として、支援という言葉が学習指導や学業指導⁽¹¹⁾ だけでなく生徒指導に関しても使われるようになってきているのである。

以上、小学校における生徒指導の動向に関して三つの特徴を述べたが、いずれにしても、小学校では学級経営の内容や方法に関する力量を高めることが初任者教員をはじめとして比較的若い学級担任の意識の大きな部分を占めており、その意味でも学級経営を中心とした生徒指導が大きなウェイトを占めているといえる。初任者研修に関する調査⁽¹²⁾ によると、初任者教員が自信があると答える教育活動は、小学校では、「学級経営」が41.1%で最も高く、中学校の25.2%を大きく上回っている。これに対して、中学校では、初任者教員が自信があると答える教育活動は、「教科指導」が47.0%で最も高く、小学校の26.5%を大きく上回っている。このように、教員としての力量形成途上にある小学校の比較的若い学級担任にとっては、学級経営が大きな関心事であることがわかる。

3 小学校学級担任の生徒指導観の実際

以上に述べた特徴が小学校の生徒指導にあるとして、実際に積極的な生徒指導観と消極的な生徒指導観とがどのように見られるかは実態を調査する必要がある。そこで、以上の特徴を踏まえ、小学校学級担任の生徒指導観の実際について明らかにする。ここでは、生徒指導観を獲得しつつある教職経験6年目の教員について、現時点で積極的な生徒指導観を獲得しているかどうかという視点から考察する。

それを実態の面から明らかにするために、小学校学級担任の生徒指導観を調査し、類似した生徒指導観を分類することにした。教職経験6年目の小学校学級担任110人（男子教員58人、女子教員52人）に対して、1996年5月から9月に、現在担任しているクラスの「生徒指導に関する最も重要な課題」について調査した⁽¹³⁾。

生徒指導観の分類に当たっては、「生徒指導の最も解決したい課題」に関して、積極的な生徒指導観を獲得しているかどうかという視点を踏まえ、回答を次の項目に分けた。すなわち、①学級経営について、②積極的な生徒指導について、③児童の問題行動への対応について、④個や集団への支援について、⑤児童理解についての5項目に分類した。

分類の方法は、担任の学級経営観が積極的な生徒指導として現れているものは①に、積極的な生徒指導の中で、学級経営観よりもさらに具体的な方法に触れているものは②に、児童の問題行動や事例を扱っているものは③に、特に支援という言葉を用いたり支援に相当する内容のものは④に、児童を理解する方法や姿勢について述べているものは⑤に分類した。また、内容が重なっている場合は最も重点をおいていると思われるものに分類した。表1がその結果である。

表1では、小学校学級担任の生徒指導観として、③の「児童の問題行動への対応について」および⑤の「児童理解について」を除いたもの（①②④）が積極的な生徒指導の内容に相当するものとして分類してある。①②④の合計は全体の73.7%を占めており、表1の分類と次節に示す具体的な内容の記述によれば、小学校では、実態の面でも積極的な生徒指導の意味に近い生徒指導観が一般的に見られ、機能としての生徒指導の捉え方に近くなっているといえる。

表1. 生徒指導観の分類

項 目	男子教員	女子教員	合 計 (%)
① 学級経営について	19人	20人	39人 (35.5%)
② 積極的な生徒指導について	10人	13人	23人 (20.9%)
③ 児童の問題行動への対応について	15人	6人	21人 (19.1%)
④ 個や集団への支援について	8人	11人	19人 (17.3%)
⑤ 児童理解について	6人	2人	8人 (7.3%)
合 計	58人	52人	110人 (100%)

(教職経験6年目の小学校学級担任)

4 生徒指導の具体例に関する考察

ここでは、小学校学級担任の生徒指導観について、上記の分類にしたがって、さらに具体的な内容について考察する。

まず、最も多かったのが①の「学級経営について」であり、学級経営を重視している点は前述した小学校における初任者教員の意識と一致するものである。小学校学級担任が、現在最も重点を置いている生徒指導の内容として①に分類されたものの中では、「児童が自分の目当てに向かって努力し、生きる喜びと充実感を味わう学級指導を行う」、「思いやる子、友達や学級のために進んでやる子を育てる。いじめのない学級づくりをする」という内容の回答が多く見られた。つまり、小学校学級担任が重視している生徒指導の第一は、学級内の生徒の人間関係を形成していくことであり、より良い人間関係に基づいた思いやりのある雰囲気のある学級を作っていくことにあることがわかる。

次に多かったものが、②の「積極的な生徒指導について」である。具体的には、グループエンカウンター的手法を採用、道徳および特別活動の時間を活用した人間関係づくり、授業におけるカウ

ンセリングの技法の採用に関するものなどが多かった。例えば、「子どもたちのより良い人間関係づくりに心がけ、グループエンカウンターをとおして、カウンセリングマインドで接する」という回答に見られるように、学級活動をとおして積極的に集団の育成を心がけていこうとするものである。グループエンカウンターなどの手法を用いて生徒の人間関係を意図的に築いていったり、学級活動や帰りの会などで「良いこと発見カード」、「すてき発見」、「振り返りカード」などの活動を行い、児童の可能性を発見する機会を多く設けていることに特徴がある。ここには、児童の人間関係や集団形成を開発的な手法で意図的に図っていくという意味での積極的な生徒指導観が表れている。

そして、表1における積極的な生徒指導に含まれる内容の中では、④の「個や集団への支援について」が続いている。この中には、従来の指導とほとんど変わらない内容まで支援という語を多用する傾向もあるが⁽¹⁴⁾、支援という言葉の意味をよく把握したものとして次のような回答が見られた。「一人一人の子どもが個性や能力を伸ばし、自己実現を図れるように支援・指導していきたい。そのためにも子どもの心に寄り添い、心のふれ合う生徒指導を目指したい。子どもを共感的に受け止め、共感的な人間関係づくりを支援したい。」この記述の中では、支援の具体的な内容や方法には言及されていないが、支援という言葉の意味が児童の個性や能力を伸ばすための共感的な受け止めや共感的な人間関係づくりとして捉えられている⁽¹⁵⁾。

以上に示した積極的な生徒指導観の一方で、生徒の問題行動への事後指導として対応しているという意味で消極的な生徒指導観が見られた。表1の分類の中で、消極的な生徒指導の内容としては、③の「児童の問題行動の対応について」が該当する。具体的な内容としては、「1年生男子の登校拒否の児童の指導」、「2年生男子の問題を抱えている子の指導」、「6年生女子の問題行動について」、「外国籍の児童への指導」、「学習に意欲を示さない男子への指導」、「学級のきまりの指導」等が見られた。これらは、現在の「生徒指導に関する最も重要な課題」が、児童の問題行動に関するものであり、教職経験6年目という時点を考慮すると、学級担任としてこうした問題へ対応して経験を積み重ねることによって、生徒指導観が再構築されより積極的な生徒指導観を獲得していくものと考えられる。

以上の分類と考察をもとに、小学校学級担任の生徒指導観を消極的な生徒指導と積極的な生徒指導、および集団的指導と個別的指導の2軸で捉えて図に表せば、図1ようになる。図1で、④の「子や集団への支援について」に関するものには、集団への支援と個への支援に関するものがあり、⑤の「児童理解について」は、児童の問題行動に関連したものと積極的な生徒指導として個への支援に関連したものがあつた⁽¹⁶⁾。

今日の教育課題と生徒指導の問題を踏まえ、児童の社会性を育成する観点に立てば、個々の児童へは、図1の右下の部分に相当する支援を中心とした生徒指導観に立ち、学級経営の中では右上の部分に相当する生徒指導観に立って指導を進めていくことが重要であるといえる。

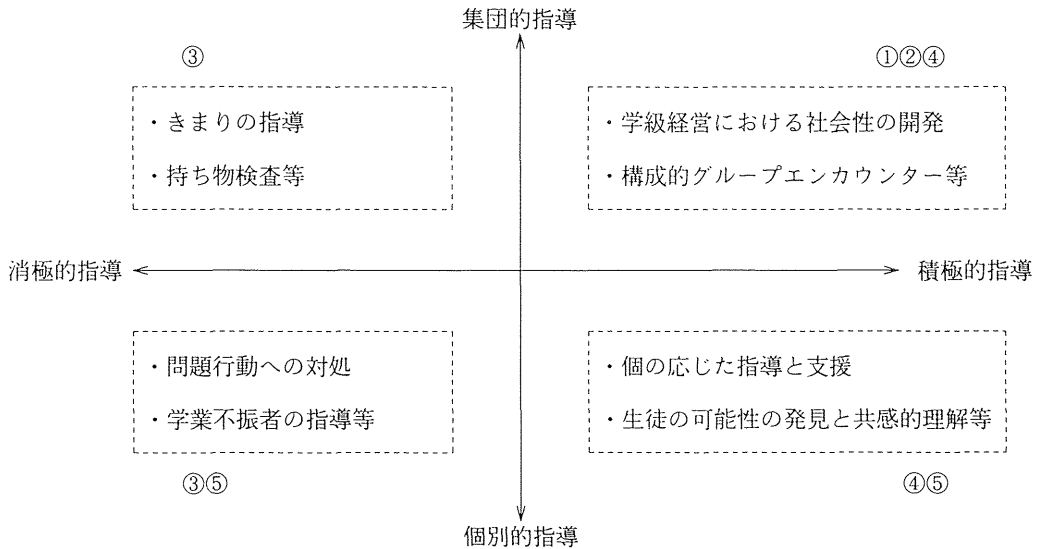


図1. 小学校学級担任の生徒指導観の分類と位置

5 生徒指導観の獲得過程と研修に関する示唆

以上の考察に基づき、小学校学級担任の生徒指導観の獲得過程について考察を加えたい。教員の職能成長の過程では、「20歳代の前半から後半ないし30歳前後にかけて第1回の職能成長期をもち、30歳代の前半から後半ないし40歳前後にかけて第2回の職能成長期を持ち、その後ゆるやかな高原状態」を示すといわれ、特に「子どもの心理や発達についての知識やそれらを正確に把握する力」については、28歳～32歳の間に一つのピークが表れている⁽¹⁷⁾。

こうした教員の職能成長を踏まえれば、本稿で考察した積極的な生徒指導観は、初任者研修や校内研修などの研修や学級担任の体験などによって教職経験5年程度から少しずつ獲得されていくものと考えられる。小学校学級担任の場合は、学級経営の中で自然に獲得される積極的な生徒指導観が基盤になり⁽¹⁸⁾、問題行動への対応という消極的な生徒指導の経験を積みつつそれまでの生徒指導観が再構築され、教職経験5年程度から積極的な生徒指導観に基づく教育実践が充実してくるものと考えられる。

さらに、教職経験5年以降の職能成長を想定して生徒指導観の変容を考え、生徒指導観の獲得の契機として、都道府県教育委員会や地方教育委員会の行う初任者研修、教職経験5年研修、教職経験10年研修などの研修を位置づければ図2のように捉えられるであろう。図2では、生徒指導観の獲得過程を仮説的に教員の研修との関連で位置づけ⁽¹⁹⁾、教職経験10年から15年程度には、教師個人の教育観が一応確立し学級経営と生徒の人格形成への関与も含めた生徒指導観を持つことができるようになり、教職経験20年程度には生徒指導および生徒指導観に関する校内研修でのリーダー的役割を

果たすことができるようになると想定している。

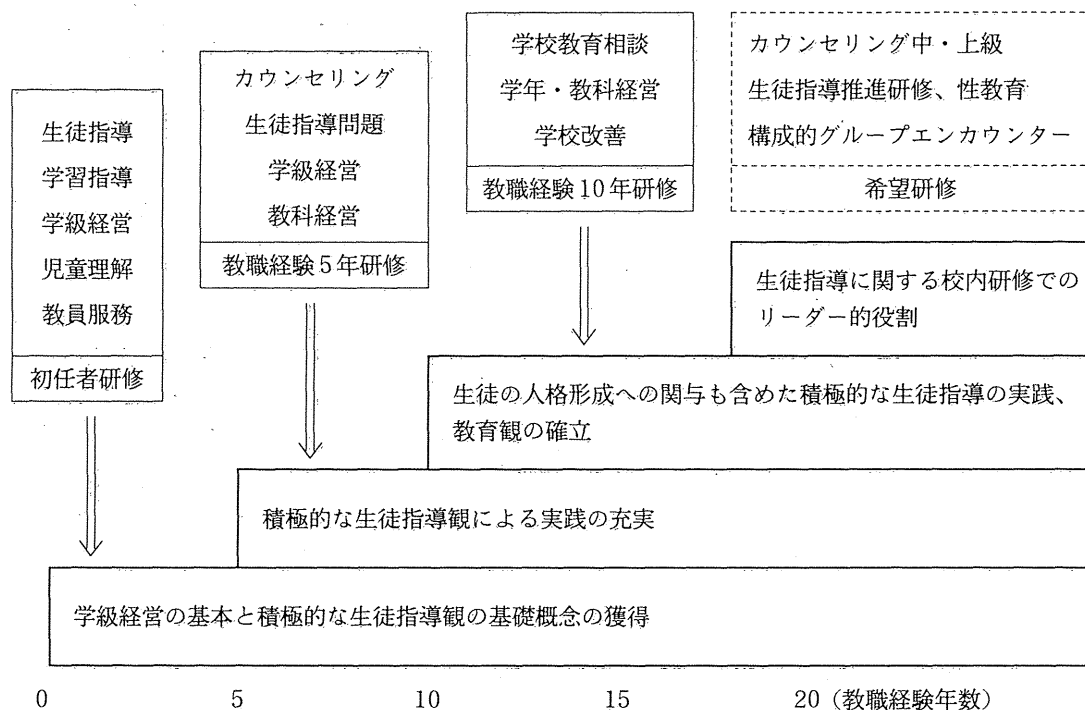


図2. 職能成長の過程における小学校教員の生徒指導観の変容

6 本稿のまとめと今後の課題

本稿では、小学校学級担任の生徒指導観について考察し、小学校では機能としての生徒指導の捉え方に基づく積極的な生徒指導観が見られること、特に最近では支援という言葉が積極的な生徒指導の内容と密接な関連を持って使われていることなどを指摘した。そして、実際に小学校学級担任の生徒指導観として積極的な生徒指導観がどのように見られるかを明らかにし、積極的な生徒指導と消極的な生徒指導、集団的指導と個別的指導の2軸を用いて生徒指導観を分類した。

今後の課題は、次の三つである。第一に、積極的な生徒指導観の獲得過程に関する考察をさらに深めることである。本稿では、小学校学級担任の生徒指導観の実際を考察し分類することに主眼を置いたので、積極的な生徒指導観の獲得過程に焦点を当てた研究が今後必要とされる。

第二に、本稿で仮説的に位置づけた生徒指導観の獲得過程と研修との関係を実証的に明らかにすることである。これは、現在行われている生徒指導に関する研修の評価や新しい研修プログラムの開発の問題とも関連する重要な課題である。

第三に、小学校に限らず、登校拒否、いじめ、自殺予告など生徒指導に関する問題が依然として深刻な状況であることから、中学校・高等学校の学級担任に関しても生徒指導観の実際を明らかにし考察することが必要である。

最後に、今後の生徒指導の方向として、第15期中央教育審議会第1次答申（1996.7.19）において「これからの変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる、人間としての実践的な力」として「生きる力」が協調されたことは、今後も生徒指導の重要性が認識され、集団の中での社会性の育成が児童一人ひとりの自律性とともさらに重視されていくものと受け取ることができる。図1の分類で示せば、右下の部分の支援をもとに右上の部分の指導を強めることが今後は重要になると指摘できる。

(注)

- (1) 瀧野揚三「生徒指導に関する心理学的研究の動向と課題(1)」『大阪教育大学紀要』第IV部門第43巻第2号、1995年、171頁。

さらに、瀧野は生徒指導の研究および教育領域に関して、「生徒指導の研究・教育領域は、現在起きている問題への対処にとどまらず、その前段階にあるべき、生徒や教師や学校に関する『知識』に関したものの、社会化をすすめる開発的な指導に関したもので含めていくべきである」（瀧野揚三、同上論文、171頁）としており、開発的な生徒指導を考察するうえで参考になる。

- (2) 学級経営と生徒指導に関しては、中学校における校内暴力が全国的な問題となっていた1970年代後半から1980年代にかけて、下記の書物で代表されるように、理論を踏まえた実践への示唆が多く出されてきた。

木原孝博『生徒指導の理論』教育学大全集第33巻、第一法規、1982年

木原孝博『現代生徒指導論』教育開発研究所、1984年

宇留田敬一『生徒指導のための学校経営』学校運営研究全書17、明治図書、1982年

本稿では、平成元年改訂学習指導要領に対応する平成3年の生徒指導要録の改善による生徒指導の変化、そして、最近の生徒指導の傾向としてグループエンカウンターなどが重視されてきていることなどを踏まえ、社会性の育成を目指した開発的な生徒指導を視点として小学校学級担任の生徒指導観を考察する。

- (3) 生徒指導観について、武藤孝典は、それを一つの教育観として「子どもの“自己指導の力”を育てる重要なはたらきを行う」ものとして捉え、それが特別活動の領域においては直接的に、教科指導の領域においてはカウンセリングの学習指導として働く捉えている。（武藤孝典『生徒指導の理論』放送大学教育振興会、1991年、13頁）

- (4) 角田豊・大西久男等は、小学校教員の指導観が経験年数が増加するにつれて「<教師主導-集団志向>の指導観を否定する傾向がある」こと、小学校よりも中学校・高等学校の教員の方が

「<教師主導－集団志向>の指導観を肯定する傾向にある」ことを指摘し、その理由を「中学校における生徒指導の困難さゆえの、強力な指導の必要性が認識されていると思われる」としている。(角田豊・大西久男他「現職教員の教育観とその変容可能性に関する調査研究」『鳴門教育大学研究紀要(教育科学編)』第10巻、1995年、68頁)

(5) 文部省『生活体験や人間関係を豊かなものとする生徒指導』生徒指導資料第20集、1988年、1頁。

(6) 木原孝博は、機能としての生徒指導の考え方に精神的条件整備機能論と人格形成機能論との2つがあるとし、自身は後者の立場に立つとしている。(木原孝博『生徒指導の理論』教育学大全集第33巻、第一法規、1982年、55～60頁)

坂本昇一は、生徒指導の機能として、児童生徒に自己決定を与える、存在感(自尊感情)を与える、自己実現の場を用意する、人間的ふれあいを基盤にするの4点を挙げている。(坂本昇一『生徒指導の機能と方法』文教書院、1990年、55～65頁)

本稿では、生徒指導と学習指導という領域的な分類との対比のうえで、機能概念として生徒指導を把握している。

(7) 文部省『生徒指導の手引き』1965年、1頁。

(8) グループエンカウンターについては、非構成的方法と構成的方法とがあるが、本稿では学級担任の指導の下で実践しやすい構成的方法を指す。(静岡県立教育研修所教育相談部「グループエンカウターの考え方・進め方」静岡県立教育研修所『教育研究』第81号、1995年、91～112頁参照)

(9) 西野範夫「子供のよさを生かす学習指導と評価」『初等教育資料』1991年6月号、15頁。西野氏は文部省教科調査官。

(10) 児童生徒の問題行動に関する調査研究協力者会議「いじめの問題に関する総合的な取組みについて」(1996.7.16、『教育委員会月報』1996年7月号、41頁)。同報告書では、教員の指導観について次のように言及している。「教師はこの個性を尊重し、子どもの人格のより良き発達を支援するという児童生徒観、指導観に立つことが極めて重要」(同上書、28頁)である。

(11) 本稿では、生徒指導の一環としての学業指導を次のように捉えている。学業指導とは、「ひとりひとりの生徒が学校におけるすべての学習活動に自主的、積極的に取り組むように援助・指導すること」であり、「学業不振の傾向を示す一部の生徒を対象とした矯正的ないしは治療的な指導の範囲にとどまらず、すべての生徒を対象とし、みずから学ぶという積極的、意欲的な学習の態度、自己への信頼感、豊かな創造性などを育成しようとする開発的な指導に重点をおく」(文部省『中学校における学業指導に関する諸問題』生徒指導資料第9集、1973年、1～3頁)という捉え方であり、生徒指導を機能と捉える考え方に立っている。

(12) 坂本孝徳「研修後の力量に関する初任者の自己評価」牧昌見他『効果的な初任者研修プログラムの研究開発』平成4年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、1993年、203～206頁。こ

れは、初任者研修受講後8か月の時点の力量に関する初任者教員1,561人の自己評価によるものである（回収率67.8%）。

坂本は、小学校・中学校の教員における「これらの差異は、小学校が学級担任制であるのに対して、中学校は教科担任制をとっていることによっていると推察できる」（坂本孝徳、同上論文、203頁）としているが、本稿では、それらの差異に付随する生徒指導観の差に着目する。

- (13) 静岡県下の学級担任をしている小学校教員に記述式を主に面接法を併用して調査をした。質問事項には、学習指導に関するものと生徒指導に関するものがあり、面接は生徒指導に関する本人の記述内容について補足的に28人に行った。調査の対象者110人の分布は県内全域である。
- (14) 深澤広明は、授業の指導観の転換が指導から支援へといったスローガンの変更ですまされる問題ではないと述べ、「現代学校において子どもの主体的な学習活動を重視する授業観への転換は、『指導』という用語を『支援』に置き換えることで実現するのでは」なく、「現代学校において学習者の主体性を重視するような指導のあり方が、あらためて『子どもから』の教育思想において再検討され、授業指導論として再構成することが、求められている」（深澤広明「『子どもから』の教育思想としての指導観の転換」日本学校教育学会編『学校教育研究』第11号、1996年、22～23頁）と指摘している。本稿においては、教職経験6年目の小学校学級担任の生徒指導観の調査において、支援という言葉が使われている場合の内容を検討して分類した。
- (15) 児童生徒の「個性の尊重」を重視する考え方は、中学校の教員よりも、小学校の教員の生徒指導観として顕著である。藤原正光は、教師の子供観について小中学校の教師392人を対象に意識調査を実施し、「全体として、『思いやり』、『一生懸命努力する』、『元気に遊べる子』を期待する傾向が強く認められた」とし、中学校の教員よりも「小学校の教師の方が、『個性の尊重』をより重要視している傾向がみられた」（藤原正光「教師の教職意識と教育活動―道徳、クラブ活動、学級経営―」文教大学教育研究所紀要第3号、1994年、33～44頁）ことを明らかにしている。
- (16) ⑤の「児童理解について」は、次のような回答に代表される姿勢のものが多かった。「いじめや仲間はずれなどの偏見や差別につながるような表れが起こらないように、また、起こったとしても早期発見できるようになるべく子供と接する時間を増やすようにしている。授業だけでなく朝運動、休み時間や掃除中、放課後の活動などで一緒に遊んだり雑談する中からも児童を理解するように心がけている。子どもを理解するためには、まず子どもの考えや思い、願いを共感し認めることだと思う。いじめにつながるような発言や行動はどんな小さなことでも絶対に許さないという態度で子どもと接し、互いの人格や人権を認めあうことの大切さを伝えていきたい。」この回答からは、教職経験6年目の教員として、児童の人格や可能性を受け止めようとする真摯な姿勢が読みとれる。
- (17) 岸本幸次郎「中堅教員の研修と職能成長」伊藤和衛編『現職教育の再検討』教師教育の再検討3、教育開発研究所、1986年、237～238頁。
- (18) 本稿で消極的な生徒指導として位置づけている「きまりをまもらせることに意義を認める指

導」は、小学校教員よりも中学校教員において多いことが実証されている。(南本長穂「児童・生徒への対処にみる教師の行動(1)―教師の職業的社会化へのパースペクティブ―」愛媛大学教育学部紀要教育科学第41巻第2号、1995年、1～19頁。小中学校教員1,600人(有効回答数853人)の調査による。)

- (19) 牧昌見は、「教師の変容は、研修によってのみ実現できる」として教員研修による教師の職能成長上の変容を重視している(牧昌見「教師と研修」牧昌見『新採用～5年の教師の実務』樹村房、1986年、182頁)。牧は、教員研修の体系化に関する問題として、教員のキャリアの中のどこに節目をつけるかというライフサイクルの問題、その節目ごとの研修プログラムの開発の問題、多様な職能成長を示す教員に対する多様な研修プログラムの問題などを指摘している。(牧昌見「時代の変化に対応する教師の指導力と研修」『初等教育資料』、1997年1月号、6～7頁)